

「死海」のほろ苦い体験

地球上にはいくつかの塩水湖がある。その中で世界的に最も知られているのが、かの「死海」である。地勢上はアフリカ大地溝帯の北端とされている。ヨルダンとイスラエルの中部国境地帯に位置して、その両国が領土を分ち合っている。なだらかなドライブウェイを吸い込まれるように下り、シー・レベル(海拔0m)を通過し、辿り着いた海拔マイナス 418m地点に天下の「死海」は姿を表す。

そこは年間を通して 20~39℃と高温で降雨量が少ないため、水分が蒸発し塩分が濃くなったと言われている。通常海水の塩分濃度は3%であるが、「死海」の塩分は約 30%で、10 倍も濃いため特殊な海藻以外の生物は棲息出来ず、その海水には人体が自然に浮上する浮力もある。

この「死海」の特産品として、クレオパトラが好んだとされる泥に含まれたミネラルが美容に良いとされ、その「泥パック」が日本でも一般に市販されている。だが、この「泥パック」が本当に美容に効果があるのだろうか。濃すぎる塩分が皮膚を傷めることになりはしないか、些か気になっていた。

「死海」滞在中に 30 分以内と制限されて海水に入った。すると、あらっ！不思議。本当に足の方からふっと浮いてくるのだ。だが、身体が思いのほか自由にならず、抜き手を切って泳ぐというわけにはいかない。まるで操られているような不思議な錯覚に陥る。シャワーをたっぷり浴びてそのまま旅を続けた。ところが、その夜になって急に体調がおかしくなった。眠っていた「痔」病を目覚めさせてしまったのだ。濃い塩分が身体に良くなかったようだ。直ぐ国際電話でかかりつけの医師に相談すると、応急の処置を教えてくれ、早く専門医に診てもらった方が良いとのこと忠告により、日程を繰り上げ帰国して専門医院に直行した。塩分は痔主や皮膚病患者には要注意のようだ。

肛門科医師の見立てでは、濃い塩分が身体に入って患部を刺激したのだろうとの話だった。生物も棲めないような特殊な環境では、万物の霊長たる人間様ととても無事とはいかないものだ。

30%の塩を軽く舐め、強い塩水のうがいでお茶を濁し、浮遊する健康人間を静かに見て楽しみ、話の種にするだけで佳しとする方が賢明というのが、体験学習で学んだ処世術のひとつである。

(近藤節夫)